

小学校外国語活動へのタスク活動の導入 ～小学校外国語活動の現状と今後の展望～

Task-Oriented Activity in elementary school English Classes in Japan

玉村 紫野

Shino Tamamura

はじめに

平成20年の小学校学習指導要領改訂により、平成23年度より、小学校第5学年及び6学年において、外国語活動が導入された。外国語活動の指導計画の作成と内容の取扱いは、各学校において児童や地域の実態に応じて、適切に定めることとされている。

小論においては、小学校外国語活動の目的や考え方を明確にした上で、第二言語習得理論を基にして、具体的な指導法について提案することを目的とする。具体的には、『英語ノート』を用いた授業において問題と思われる現況を改善するために、タスクを志向した活動（Task-Oriented Activity, TOA）をフォーカス・オン・フォーム（Focus on Form, FonF）という教授法で活用する提案を行う。買い物や道案内など、具体的な場面を設定して、タスクを志向した活動（Task-Oriented Activity）をフォーカス・オン・フォーム（Focus on Form）という教授法で活用することにより、楽しく自ら話すという経験を重ねることができ、英語を話すことが恥ずかしい、または間違いを恐れて英語が口から出ないという意識を取り払い、英語が通じることの楽しさを知ることができる。

そのような多くの経験がやがて間違いを恐れず積極的に英語でコミュニケーションする態度の涵養につながり、英語で話す、聞くことに対する情意フィルターの影響を抑えることができる。外国語活動では、英語は覚えたり、正しく使用させたりせず、何よりも自分の気持ちや意見が相手に伝わった時の喜びを児童たちに数多く経験させるべきである。

1. 外国語活動導入の経緯

文部科学省は、平成20年3月28日に小学校学習指導要領を改訂し、平成23年4月1日から、小学校5学年及び第6学年に外国語活動を位置付けた。2009年度からは移行措置となり、2011年度から年間35時間の外国語活動が完全実施されている。「外国語活動」という名称ではあるが、原則として「英語」を扱うことになっている。

2. 現状分析

現在どのような外国語活動が行われているのかを、さまざまな視点から分析して、理想的な外国語活動を考察する上での手立てとする。

2.1 外国語活動の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う（文部科学省，2008）。

小学校外国語活動は英語そのものに関する知識や技能の習得を目指すのではなく、言語や文化の理解とコミュニケーション能力の素地を養うことを目的としている。文化が違って相手にも気持ちを伝えることの心地よさ、喜びを児童に味あわせることが優先されるべきである。

2.2 試行期間の外国語活動

2007年度には、外国語活動の試行期間では全国の97%の小学校で、何らかの形で外国語活動が行われていた（文部科学省，2008）。また、2007年度には何らかの形で英語活動を実施している小学校のうち、「歌やゲームなど英語に親しむ活動」を行っている学校は約95%にまで達している（文部科学省，2009b）。

筆者が参加、観察した県内の多くの小学校でも、歌やゲームが授業に導入されている。

これらの活動において、児童が英語に慣れ親しみ、楽しみながら英語に触れるという点では成功してきたと考える。しかし、ゲーム、歌、チャンツなどの活動では定型表現の練習が主目的となり、言葉を使って「相手に伝える」というコミュニケーションの基本条件を十分に満たしていない（高島 2005）。

小学校での外国語活動は中学校英語の前倒しにしない、という方針があるため小学校外国語活動は音声とジェスチャー中心にならざるを得ない。

このように、現在さまざまな小学校で行われている授業は、「外国語活動」の目標を達するまで内容を深められているか疑問である。今後小学校外国語活動においては今までの「英語を楽しむ」ということばかりに重点を置いて外国語活動の目標を達成することは難しいのではないだろうか。文字導入の是非を踏まえ、試行措置期間の外国語活動あり方について見直すことが必要である。

2.3 『英語ノート』の使用状況と取り扱いについて

文部科学省は今回の「小学校外国語活動」の導入にあたり、全国共通の小学校外国語活動の教材である『英語ノート』の配布を決定した。義務教育における教育機会均等を確保したものと考えられる。

表1は、2010年9～10月に（財）日本英語検定協会が全国の国公立小学校を対象として行った調査結果である。調査は郵送によるアンケート方式で行われ、回収数は小学校1530件（回収率30.6

%)、また同時期に教育委員会を対象として行われた調査の回収数は602件（回収率34.4%）であった（『英語教育』, 2012）。

表1 『英語ノート』の使用状況

1. 使用している	56.2%
2. 将来、配布が無くなったら困る	45.0%
3. 学校間で内容が統一されるのでありがたい	35.6%
4. 週に1回程度、利用している	25.2%
5. 月に1回程度、利用している	14.6%
6. 参考資料としてのみ利用している	9.7%
7. 独自のカリキュラムがあるため、不必要	3.9%
8. 全く利用していない	1.9%
9. 将来、配布の必要性は感じない	1.9%
10. その他	2.4%

『英語ノート』はほぼすべての学校で使用していることが分かる。全く使用していない学校は全体のわずか1.9%である。現在行われている外国語活動では、50%以上の学校が『英語ノート』に頼っている現状が把握できる。

外国語活動は「教科」ではないため、道徳の『心のノート』と同じように、その使用を義務付けるものではないが、小学校教師が外国語活動を進める上で中核となるものは『英語ノート』である。実際に愛知県内の小学校10校の外国語活動を観察または参加して調査した結果、すべての学校で何らかの形で『英語ノート』を使用していた。

指導計画の作成や授業の立案と実施に責任を持つのは学級担任であり、外国語活動は他教科のように、いつ何をどのように教えるかなどという指針は無い。そのため『英語ノート』を使っての外国語活動は学級担任の腕次第といっても過言ではない。『英語ノート』をどのように扱うことが望ましい外国語活動につながるのか考察していく。

2.4 改善すべき点

昭和61年4月、臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」の第3部第1章「外国語教育の見直し」において、「まず、中学校、高等学校等における英語教育が文法知識の習得と読解力の養成に重点が置かれ過ぎていることや、大学においては実践的な能力を付与することに欠けていることを改善すべきである。今後、各学校段階における英語教育の目的の明確化を図り、学習

者の多様な能力・進路に適応するよう教育内容等を見直すとともに、英語教育の開始時期についても検討を進める。その際、一定期間集中的な学習を課すなど教育方法の改善についても検討する」とされた（文部科学省，2008）。

臨時教育審議会の答申でも示されたように、日本の中学、高等学校では、文法知識の習得と読解力の養成に重点が置かれていた。そのため、listening と speaking を苦手としている人が多い傾向にある。中学校、高等学校では従来からの教授法として、Grammar translation approach が多く用いられている。この教授法の一般的な授業の進め方は、教師が教科書に沿って一行ずつ訳して、新出文法について説明を行う。単語や文法規則を覚えていることが英語科の評価の基本であり、英語を使って意思疎通することはあまり評価の対象にはならない（Lightbown & Spada, 2006）。そのため、自らの意思を伝達できるようになるためのコミュニケーションの能力を身に付けている日本人が非常に少ないことは指摘されている。

英語を話すことが恥ずかしい、または口から出ないという意識を取り払うために、小学校段階で、楽しく自ら話すという経験を重ねることにより、英語が通じることの楽しさを知ることが大切である。

3. 提案

試行期間に行われてきた外国語活動や、中学校、高等学校で行われている外国語科（英語）などを参考にして、今後の小学校外国語活動の考え方について考察する。

3.1 小学校外国語（英語）活動の考え方

小学校外国語活動の目標は、あくまで英語に「慣れ親しむ」のであって、音声や表現を正確に「覚える」ことは求められていない。よって、外国語活動では児童たちが机に座り、教師が黒板を使って知識としての英語を教える授業を行うのではなく、児童たちが間違いを気にすることなく授業中に英語を使い楽しむことが重要である。

文法規則の定着が重視される日本の象徴的な中学校以降の英語教育とは違い、外国語活動は知識重視ではない。英語を教え込むのではなく、アウトプットとインプットの量を増やし、相手とのインタラクションを重視して、英語を多く使うコミュニケーションの場にするべきである。英語は覚えたり、正しく使用させたりせず、何よりも自分の気持ちや意見が相手に伝わった時の喜びを児童たちに数多く経験させる場を提供するべきである。そのような多くの経験がやがて間違いを恐れず積極的に英語でコミュニケーションする態度の涵養につながり、英語で話す、聞くことに対する情意フィルターの影響を抑えることができる。これが中学、高等学校で抽象的な事象を英語で理解、表現することに結びつく。

つまり、小中高の12年間の英語教育を視野に入れて、小学校の果たすべき役割を検討する必要がある。義務教育段階である小学校では、買い物や道案内など、具体的な場面を設定して、日常生活に使える英語表現を取り扱うべきである。

3.2 小学校外国語（英語）活動における文法の取り扱い

外国語活動では、英語の表現を教えるが、文法規則は教えない。英語という言語はあくまで、コミュニケーションをとるための一つの手段であることを体験させる。そのため、表現への気付きは促すが、表現の定着に重点を置かない。形式を重視するような授業内容になれば、必然と言語がコミュニケーションの手段であるという意識が希薄になる。コミュニケーションを重視することは、いわゆる「形式」よりも「意味」や「言語使用の場面」が優先し、意味や言語使用の場面の重視が意欲や関心を持続させることにつながると考えることができる。

4. 第二言語習得研究の検討と小学校外国語活動への導入

小学校での外国語活動を考えるにあたり、第二言語習得研究（SLA Research）のさまざまな研究成果を大いに参考にする必要がある。小学校での外国語活動が、児童にとってコミュニケーションの面で効果を上げるために効果的な英語教授法について検討する。特に小論では、タスクを志向した活動（Task-Oriented Activity, TOA）をフォーカス・オン・フォーム（Focus on Form, FonF）という教授法で活用する提案を行う。

タスク活動とは、タスクの遂行を学習者に課すことによって、本物に近い言語使用の機会を教室内に作り出し、学習機会を促進させようとするものである。小学校外国語活動では、言語習得というより、タスク活動を行うことを通し、相手とのインタラクションの機会を増やし、コミュニケーションの場とすることを目指す。タスク活動（TA）の前段階として行われる活動を「タスクを志向した活動（TOA）」とする。小学校での活動は、課題解決という観点からは「タスク（TASK）」ではあるが、文法構造などの使用の観点からは、モデル・ダイアログに依存することが多く、「タスクを志向した活動（TOA）」である。（高島，2005）。一定の文法知識や表現の定着を目的としない小学校段階では、タスクを志向した活動（TOA）が有効的である。小学校における「タスクを志向した活動（TOA）」の特徴は、次のようにまとめられる。

- a. 言語を用いて課題解決をする目標がある。
- b. 2人以上による情報の授受・交換を行う。
- c. 話し手と聞き手に情報（量）差がある。
- d. 指定されたモデル・ダイアログなどに従って活動する。

小学校段階ではこの4つの条件に加え、表現内容や方法を児童が選んだり決定したりできる自由度をもつことにより、主体的に活動できる（高島，2005）。

小学校外国語活動では、文法の定着や決まりきった英語表現を無理やり児童に教え込むことはしないが、タスク活動中の「言いたいけれど、どう言えばよいのか分からない」といった戸惑いが出た際に、児童が使用する英語表現を教師が知らせる手段としてフォーカス・オン・フォーム（Focus on Form, 以下, FonF）を小学校外国語活動に取り入れる。

FonF は、Michael Long（1991）の提唱した概念で、「意味のやり取りやコミュニケーションに重点が置かれた授業において、付随的に現れた言語形式に学習者の注意を向けるもの」と定義している。また、FonF とは、「意味中心の言語理解・産出活動において、学習者の注意（attention）

を、特定の言語形式 (form) に向ける指導または学習」と概略的に定義することができる (白畑, 若林, 村野井, 2010)。

FonF とは、コミュニケーションや意味理解を中心とした授業の中で、学習者の注意を言語形式に向けさせる試みのことである。つまり、学習者が英語を使う時に、どのように語句や表現を使えば意図することが伝わるのかを体験して理解するプロセスである (高島, 2011b)。FonF は、「言語形式の焦点化」ともよばれている。FonF は、学習者が本来持つ能力を最大限に活かしつつ、気付きという働きを通してその学習を支援し、効率的な言語習得に導いていこうとするものである (和泉, 2009a)。

言語形式とその意味を暗記して使ってみるのではなく、言葉を使う目的や伝えたい気持ちを伴った本当の意味でのコミュニケーションを行うときに言語形式に意識を向ける所が FonF の特徴である。(高島, 2011a)

表2 フォーカス・オン・フォーム (Focus on Form) による指導の提案

和泉 (2009b)	提案 (玉村)
<p>(1) input repeating インプットを与えるときに、教えた項目を何度も登場させたり、イントネーションや太字体を使ったり強調して提示する。</p>	<p>(1a) input repeating ALT と学級担任で、本時に使用させたい表現を用いて、ロールプレイングを行う。実際に動物園マップを用いるなど、場面設定を明確にする。</p>
<p>(2) recast, prompt アウトプット活動の際に、教師が言い直しを与えたり、自らの間違い訂正を促す。</p>	<p>(2b) recast, prompt タスク活動中に、教師は児童の間違っている表現について、意図的に強調して正しい表現をリピートすることで、生徒が自分の誤りに気付くことを促す。</p>
<p>(3) modeling アウトプット活動の直後に、モデルとなるインプットを見せて、モデルと生徒の活動の両者を比べさせる。</p>	<p>(3c) modeling ロールプレイング後に、タスク活動を行う。活動の途中で、ALT と学級担任または、ALT と児童のロールプレイングをデジタルカメラ等の映像で再度示し、両者の表現の違いについて気付かせる。</p>
<p>(4) grammar after task activity 簡潔な文法説明を授業の最初ではなく、タスク活動の後で行い、その後に再度タスク活動を行って、言語形式の有用性を感じ取ってもらう。</p>	<p>(4d) grammar after task activity ALT と学級担任のロールプレイングを始めに提示することなく、児童は動物園マップを用いて、ジェスチャーや既習表現で意思疎通に取り組ませる。その後、ロールプレイングによって本時の英語表現を提示する。提示された英語表現を使用するとコミュニケーションがより円滑になることを体験させる。</p>

<p>(5) useful expressions for task activity 状況設定だけを示して解説なしでインプットを聞かせ、その後続く活動で使える表現を自由に拾わせる。</p>	<p>(5e) useful expressions for task activity ロールプレイング後に、学級担任が日本語で補足説明はしない。その後、児童自身がロールプレイングを見て気付いた表現を用いて、タスク活動を行う。</p>
<p>(6) planning/ rehearsal time 発表活動前に個人またはグループで準備する時間（planning/rehearsal time）を与え、内容面と共に言語面に十分な注意を注げるように配慮する。</p>	<p>(6f) planning/ rehearsal time 発表活動は児童主導にして準備する時間を十分に与える。その際、教師は個人やグループを巡回して、内容面や言語面での児童の躓きに必要の手助けをする。</p>

表 3 教授法が外国語活動に導入できる点、難しい点

教授法	導入できる点	導入が難しい点
<p>インタラクション 仮説</p>	<p>外国語活動では、言葉だけではなく、ジェスチャーを用いて相手とやり取りする場を設けることにより、自分が相手に伝えたい、または相手が伝えたいことを知りたいという態度を育成することができる。また、相手との会話のやり取りをする際には、対話相手（児童、教師）からのフィードバックによって、児童が自分の発話に問題があることに気付き、修正が促される。</p>	<p>低学年では、言葉を介して行う意味のやり取りが困難であることが考えられる。</p>
<p>全身反応教授法</p>	<p>Stand up, Sit down, Repeat after me のような表現をまず TPR で学べば、クラスルームイングリッシュとしてこれらを活用することができる。</p>	<p>TPR は、教師が英語で指示を出し、時に、その動作をしてみせる。児童たちは教師の指示通りの動作をしたり、他の人が反応したりするのを観察することによって、その意味を理解する。身振り手振りを用いて自分を表現することに比較的抵抗感の少ない低学年では、理解を体で示すことによる積極的な学習参加を促すことができる。しかし、思春期に入る高学年では、周囲の児童の視線を気にして、動作を示すことに抵抗感を持ち、身振り手振りを用いて表現することが困難になる。</p>

インプット仮説	児童が見聞きしたことがある記憶や、それに関連する内容が英語表現に含まれていると推測し理解できる部分がある。児童が興味を持ち、児童の体験に基づいた題材でインプットを図ることが重要である。その際、音声によるインプットだけでなく、ジェスチャーや実物、絵や写真を見せながらインプットを図ることが非常に重要である。	学級担任等の教師の中には、「英語の発音がうまくできない」という点で、外国語活動の指導を行うことへの不安感をもつ教師も少なくない。音声によるインプットは、小学校教師にとって負担である。また、児童にとって理解不能である英語をインプットすることにより、児童の学習意欲を低下させ、英語嫌いをつくることになる。
アウトプット仮説	アウトプットすることで自分が表現したいことが第二言語でうまく、あるいは、全く表すことができないことに気づくことがある。また、アウトプットすることで何ができないのかを認識することができる。(村野井, 2006) 外国語活動で、簡単な英語表現によってアウトプット活動を行う際にも、自分の言いたいことと言えことのギャップに気づき、さらに英語を知りたいという学習意欲を促すことができる。	外国語活動では、音声をを用いたアウトプットばかりではなく、身振り手振りをを用いて自分を表現することでアウトプットする機会を多く設ける。身振り手振りで自分を表現することに比較的抵抗感の少ない低学年では、積極的な学習参加を促すことができる。しかし、思春期に入る高学年では、周囲の児童の視線を気にして、動作を示すことに抵抗感を持ち、身振り手振りをを用いて表現することが困難になる。
直接教授法	教師は説明したり訳したりするのではなく、実際にやってみせ、児童が目標言語と意味とを結びつけるという点でこの教授法を応用するべきである。	この教授法は細かな文法教育を行わないため、小学校外国語活動に向いているようだが、完全に英語のみで授業を行うことは難しいと考える。
タスクを志向した活動	タスク活動で、自由度の高い言語活動を児童に経験させることを通して、英語に対する関心や、積極的に相手とコミュニケーションをとろうとする態度の育成ができる。	単に英語を使用させる機会を与えるだけでなく、実施する言語活動がどのような能力の育成に寄与しているかということを、教師が明確に認識しなければならない。
フォーカス・オン・フォーム	タスク活動中の、「言いたいけれど、うまく言えない。」という児童の戸惑いや気づきを大切にするために、正しい表現を教師が児童に教えるのではなく、フォーカス・オン・フォームの様々な観点から、児童を英語表現に導くことができる。	中学、高等学校の英語科の免許を取得している小学校の学級担任は稀であるため、タスクを志向した活動をフォーカス・オン・フォームという教授法で活用する授業を多くのクラスに浸透させることが難しいと考えられる。

5. SLA の研究成果を活かした授業

愛知県内のいくつかの小学校での外国語活動の授業に参加・見学した結果、次のような望ましくない使用例が観察された。

- a. 日本人教員が『英語ノート』という教材に依存しすぎて、ただ単に『英語ノート』を消化することが一義的な教室活動となっている。
- b. 母語話者 ALT 教員とのチームティーチングの場合ですら、日本人教員（クラス担任）がもっぱら日本語で『英語ノート』を消化することに専念し、ALT は CD の代わりの役割しか果たしていない。
- c. 日本人 ALT が日本語でクイズを出題して、児童が日本語で答えることを繰り返し、児童が一度も英語を発音せずに授業が終わる。
- d. 活動の際に使用する単語カードを切り取る作業で一時間の授業の大半を費やしている。
- e. 児童は、学校外で学んだ英語のスキルで、日本人教員が行う『英語ノート』の「リスニングテスト」に対応している。
- f. 学校外で英語を学ぶ機会のない児童の中には、『英語ノート』の「リスニングテスト」に耐えられず、自分は英語ができないと自覚し、有能感の喪失につながっている。

以上のような問題点を多く克服するために、5.1では FonF に基づく授業を提案する。

5.1 Focus on Form に基づく授業

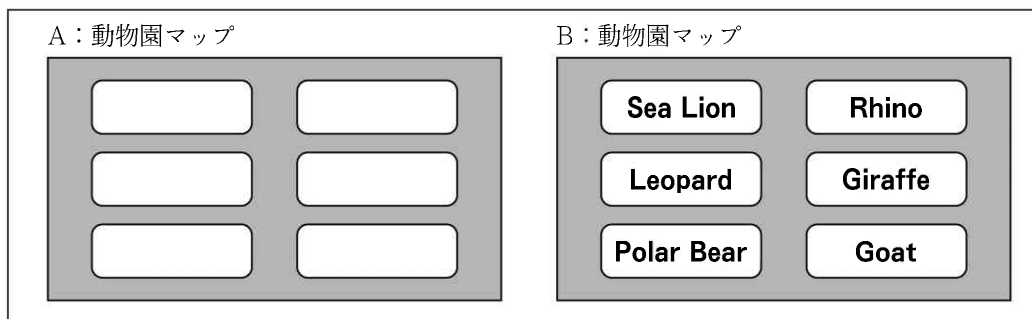
FonF を取り入れた指導例では、「動物の場所をたずねよう」というテーマで提案する。本活動では、動物の英語表現を知るとともに、動物園の動物の場所をたずねたり、相手に動物の場所を案内したりすることを目指す。児童たちにはインフォメーションギャップがあるため、相手が知っている情報を知りたい、または、相手に動物の場所を案内したいという気持ちが生まれ、そこにインタラクションが起こる。動物園の動物の場所を聞き、自分のマップに書き入れるというタスクを遂行するという点で、タスクを志向した活動（TOA）と言える。活動を行う際に、相手の情報を知りたい、案内したいという気持ちはあるが、どのような言葉や動作を用いればよいのかという戸惑いを、FonF という概念を用いて、児童たちを活発な言語活動の場へと導いていくことを意図している。

具体的な指導法については、以下で述べる。

図1 FonF を用いた指導例

1. テーマ 動物園の動物の場所をたずねよう
2. 本時の目標 動物の英語表現に興味を持ち、動物園の動物の場所をたずねたり、案内することができる。
3. 本時の目標表現
 - Go straight. • Turn left/ right.
 - Go straight and stop. • I like ____ .

4. 準備 動物絵カード、動物園マップ、ビデオカメラ、テレビ



5. 活動過程

児童の活動	学級担任の活動	ALT の活動	指導上の留意点
1. あいさつをする。	• 全体に挨拶をする。		• 英語の時間が始まったことを意識させるよう、英語であいさつをする。
2. ALT と学級担任のロールプレイングを見る。	• 動物の名前を導入するために、ロールプレイングを行う。(1a.e) 担任: How do you say [] in English? (手に動物のピクチャーカードを持ちながら) もしくは、動物の鳴き声を聞かせて、児童に動物を連想させる。 ALT: It's a polar bear.		• 動物の名前だけでなく、英語の表現を聞く際の How do you say [] in English? という表現も児童の耳に触れさせる。(5e)
3. 動物当てクイズをする。	• 動物の英語表現を知るために、ミッシングゲームを行う。		
4. タスク活動前にロールプレイングを見る。	• 動物園の中の動物の場所を聞くための表現について、動物園マップを用いてロールプレイングを行う。(5e) 担任: Hello. I want to see giraffes. Where are giraffes? ALT: Go straight. Turn right. 担任: Thank you. • 学級担任は白紙のマップ A を持ち、ALT は動物の位置が書かれたマップ B を持つ。学級担任は ALT に動物の位置を尋ね、聞き取った動物をマップ A に書き込む。		
5. タスク活動を行う。児童グループ①は白紙 A のマップを持ち、児童グループ②は動物の位置が書かれたマップを持つ。①は②に動物の位置を尋ね、動物をマップに書き込む。ペアを変えて、マップを埋める。	• 学級担任や ALT もタスク活動に加わる。大きな声で正確な英語を言うことにより、周りの児童へ正確な英語表現を促す。(2b) • 学級を巡回して、内容面や言語面での児童のつまづきに必要の手助けをする。(6f)		• ロールプレイングで使われた表現のみを児童に使わせようとするのではなく、ある程度のジェスチャーを認めていくなど、相手に情報が伝わればよいものとする。

6.1 タスク活動をビデオカメラに向かって行い、記録される。	<ul style="list-style-type: none"> • さまざまな英語表現をしているグループを取り上げ、ビデオカメラで記録する。(3c) 	
6.2 テレビに映し出されたタスク活動について比べ、どちらがスムーズに意思疎通ができているのかを、考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> • 児童と児童、児童とALTが行っているタスク活動をテレビに映し、比べさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> • どちらのペアの会話が優れているというのではなく、どちらのペアの会話の方が意思疎通がしやすいのかを児童に考えさせる。
7. ビデオの記録を見て考えた後に、タスク活動を再開して、マップを完成させる。	<ul style="list-style-type: none"> • ビデオの記録を見て考えた後に、タスク活動を再開させる。 	
8. 動物の位置を教える側と、白紙マップAを埋める側が交代して、再度タスク活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> • グループ①とグループ②を入れ替え、動物の位置を教える側と、位置を尋ねマップを埋める側を交代させ、再度タスク活動を行わせる。 	
9. 答え合わせをする。	<ul style="list-style-type: none"> • 活動の後には必ず答え合わせや、教師からのフィードバックを行う。(3c) 	
10. 終わりのあいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> • 終わりのあいさつをする。 	

ここで、SLAの研究成果を活かした授業を行うことにより、9ページで挙げた外国語活動の問題点を解決することができると思う。それを以下の表で述べる。

表4 外国語活動の問題点と本提案による解決

(12)で指摘した問題点	本提案による解決
(a) 日本人教員が『英語ノート』という教材に依存しすぎて、ただ単に『英語ノート』を消化することが一義的な教室活動となっている。	外国語活動では、『英語ノート』を全て消化することが目的ではない。タスク活動を行う際の、題材として用いる程度でよい。
(b) 母語話者ALT教員とのチームティーチングの場合ですら、日本人教員(クラス担任)がもっぱら日本語で『英語ノート』を消化することに専念し、ALTはCDの代わりの役割しか果たしていない。	ロールプレイングを行う際に、積極的に日本人ALTや母語話者ALTと児童が言語によってコミュニケーションを図る機会が多々生まれるため、必然的に母語話者ALTの機械の代用のような誤った活用方法は減る。

<p>(c) 日本人 ALT が日本語でクイズを出題して、児童が日本語で答えることを繰り返し、児童が一度も英語を発音せずに授業が終わる。</p>	<p>タスク活動の際に、児童同士、または、児童と教師が英語でインタラクティブを行うことにより、どの児童も英語を話す機会を設けることができる。</p>
<p>(d) 活動の際に使用する単語カードを切り取る作業で一時間の授業の大半を費やしている。</p>	<p>タスク活動の遂行がメインになるので、そのための補助的作業時間は減らせる。児童に教室で準備させる必要はない。</p>
<p>(e) 児童は、学校外で学んだ英語のスキルで、日本人教員が行う『英語ノート』の「リスニングテスト」に対応している。</p>	<p>タスク活動を FonF という概念を取り入れて行うことにより、児童は正しい英語を教師に強要されるのではなく、自分の英語も相手に伝わるという喜びや嬉しさを経験する。そのような活動を通して、正確な英語を話したり、完璧に英語を聞き取ったりすることができなくても、相手に伝わるという経験を重ねることができるため、「リスニングテスト」対策を学校外で行う必要性が減る。</p>
<p>(f) 学校外で英語を学ぶ機会のない児童の中には、『英語ノート』の「リスニングテスト」に耐えられず、自分は英語ができないと自覚し、有能感の喪失につながっている。</p>	<p>自分の英語も相手に伝わるという喜びや嬉しさを経験するため、さらに英語を使おうという自発的な態度につながる。英語の正確さを矯正されることは少ないので、完璧に英語を聞き取ったり話したりすることができなくても、英語を使うことに対して自信が持てる。</p>

まとめ

小論においては、小学校外国語活動の目的や考え方を明確にし、第二言語習得理論を基にして、具体的な指導法について提案することを目的とした。具体的には、『英語ノート』を用いた授業において問題と思われる現況を改善するために、タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity, TOA) をフォーカス・オン・フォーム (Focus on Form. FonF) という教授法で活用する提案を行った。このような提案を外国語活動に取り入れることにより、小学校段階で、楽しく自ら話すという経験を重ねることができ、英語を話すことが恥ずかしい、または間違いを恐れて英語が口から出ないという意識を取り払い、英語が通じる楽しさの経験につながる。

[注]

- (1) 本論文では、試行期間とは2009年度の「移行期間」とそれ以前の期間も含める。「移行期間」とは、文科省に従い、2009年度から2010年度までを指す。
- (2) 本論文に出てくる「タスク活動」は、特に示さない限りは、タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity, TOA) と同じ意味で使用する。
- (3) 本論文に出てくる多くの小学校とは、あま市、岡崎市、春日井市、名古屋市、長久手市、日進市内の計10校で外国語活動に参加または見学した学校を指す。

[参考文献]

- 和泉 伸一 (2009a) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 東京：大修館書店
- 和泉 伸一 (2009b) 「内容重視のインプットとアウトプットを通したフォーカス・オン・フォームの指導」『英語教育』第57巻 第12号，東京：大修館書店
- 桐生 直幸 (2009) 「『英語ノート (試作版)』に見られる小学校外国語活動のコミュニケーション活動の分析」、『鎌倉女子大学紀要』第16号，鎌倉女子大学
- 小池 生夫 (1994) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 東京：大修館書店
- 坂本ひとみ (2010) 「小学校における国際理解教育のテーマ別英語学習」『東洋学園大学紀要』18，東洋学園大学
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『詳説 第二言語習得研究－理論から研究法まで－』 東京：研究社
- 高島 英幸 (2000) 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法の指導』 東京：大修館書店
- 高島 英幸 (2005) 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク－34の実践と評価』 東京：大修館書店
- 高島 英幸 (2011a) 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 東京：大修館書店
- 高島 英幸 (2011b) 「日本の英語学習環境に適した「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ」『英語教育』第57巻 第6号，東京：大修館書店
- 高橋 一幸 (2010) 「『英語ノート』をどう活用するか－その長所と問題点をふまえて－」『英語教育』第59巻 第9号，東京：大修館書店
- 内藤 徹 (2010) 「小学校外国語活動－理論から実践へ－」『仁愛女子短期大学紀要』，仁愛女子短期大学
- 藤井 浩美 (2005) 「日本の英語授業におけるタスク活動の特徴と課題－小学校・中学校のタスク活動の分析を通して－」『鳴門教育大学研究紀要』第20巻，鳴門教育大学
- 新里 眞男 (1999) 「実践的コミュニケーション能力の育成を目指した英語教育の展開」『中等教育資料』5月号，文部省
- 西崎有多子 (2009) 「「小学校外国語活動 (英語活動)」における指導者の現状と課題」『東邦学誌』38 (1)，愛知東邦大学
- 西部真由美 (2008) 「小学校英語活動必修化－その背景・現状・課題」『東邦学誌』37，愛知東邦大学
- 村野井 仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東京：東洋館出版社
- 文部科学省 (2009 a) 『英語ノート1』 東京：教育出版
- 文部科学省 (2009b) 『英語ノート 指導資料』 東京：文部科学省

- 文部科学省 (2010) 『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京：旺文社
- 山本 卓 (2009) 「この授業は何を目指すのか？小学校英語教育における曖昧性の問題」『外国語教育フォーラム』3, 金沢大学外国語教育研究センター
- 横山 紀子 (2001) 「語の意味の習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』11号, 日本語国際センター
- D.L.フリーマン (1990) 『外国語の教え方』東京：玉川大学出版部
- Asher, J. (1982) *Learning another through actions: The complete teacher's guidebook, 2nd ed.* Los Gatos, Calif.: Sky Oaks productions, Inc.
- Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition.* Oxford University Press.
- Gurian, M. (2007). *Nurture the nature.* San Francisco, CA: Josser-Bass.
- Johnson, J., & Newport, E. (1989). Critical period effects in second language learning: The influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology*, 21, 60-99.
- Krashen, S. (1984). *The Input Hypotheses. Issue and implications.* London: Longman.
- Lightbown, P.& Spada, N. (2006) *How Languages are Learned.* Oxford University Press.
- Long, M (1983) "Does second language instruction makes a difference? A review of the research," *TESOL Quarterly* 17:359_82.
- Long, M (1996) "The Role of the Linguistic Environment in Second Language Acquisition." In Rictchie, W.C. and T.K Bhatia (eds) *Handbook of Second Language Acquisition.* San Diego: American Press
- McLoughlin, B. (1990) "Restructuring." *Applied Linguistics*, 11, 2, 113-128 Pasty M.
- Pica, T. (1994). "Review Article: Research on Negotiation: What Does It Reveal about Second-Language Learning Condition, Processes and Outcome?" *Language Learning*, 44, 3, 493-527.
- Skehan, P. (1998) *A Cognitive Approach to Language Learning.* Oxford: Oxford University Press.
- Swain, M. (1985). "Communicative competence: Some roles of comprehensible input & comprehensible output in its development," In S. Gass & C. madden (Eds.), *Input in second language acquisition.* Cambridge, MA: Newbury House.

本論は、平成22年度教育学研究科修士論文を加筆・修正したものである。